

Global Communication Projects in Nishinomiya Imazu (GCPN)

- シンモク高校（ソウル）との異文化交流学習の実践 -

小西 和治¹⁾・佐藤 万寿美²⁾（兵庫県立西宮今津高等学校）

1) 地歴・公民 kazkonis@hyogo-c.ed.jp 2) 数学・情報 masato@hyogo-c.ed.jp

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~imazu-hs/>

キーワード：国際交流，学校間・地域交流，テレビ会議，産学連携，高大連携，web サイト，韓国

1. はじめに

兵庫県教育情報ネットワークの活用実践例として，人と人とのコミュニケーションテーマに，平成 12 年度よりテレビ会議システムの研究と活用を始めた。昨年度までは，県内の高等学校や養護学校とのコミュニケーションを授業に取り入れた。掲示板や web コンテンツを共有することで，生徒同志や担当者などのネットワークコミュニケーションにより，他校の教諭とのチームティーチング（TT）の実現は，教育効果をより高め，新たな発見にもつながり生徒により良いものを提供できる機会となった。昨年度の経験を生かし，本年度は，県内・国内だけでなく，国外との交流に挑戦をした。地球上のすべての教師と生徒が集う場を提供するプロジェクト「Global Communication Projects in Nishinomiya Imazu Seniorhighschool (GCPN)」である。国際交流だけにこだわらず，国内や校内などの交流学習や TT が特徴である。とくに校内では複数の教科や科目が関わる教科横断型，情報推進委員会などもバックアップできる体制づくりなどをすべて web コンテンツ化し資源を共有できるようなシステムの構築が目標である。「資源共有はコミュニケーションの原点である。平成 15 年度からの新学習指導要領にて有効活用されることを期待し，また，今年 2 月に教育情報ネットワークが光ファイバーへ移行したことで，ますます多様な交流学習が展開できるように，GCPN の授業実践を報告する。



図 1. GCPN プロジェクト学習用のページ（本校 web サイト）

2. GCPN の目的と概要

GCPN の目的は，「コミュニケーション」の拠点となることである。地域社会への情報発信基地となる web サイトの構築と，校内での教科横断型連携学習を目的としている。このプロジェクトでは，コンピュータやインターネットを道具として活用し，人と人との心のこもったコミュニケーションを体験するなかから，生きる力を身につけ，自己の存在感や相手の立場を考える思いやりなどを育成することができる。さらには様々な交流学習の中で，ネットワークの特性を理解することにより，情報発信者としての責任感が芽生え，社会の一員であることを実感することができる。下記のような様々な交流学習や連携プロジェクトをコーディネートし，授業実践から，様々なコンテンツや技法を web に蓄積し，共有化を図ることで教育の情報化や社会の情報化を積極的に担うものである。学校教育における「心の教育」「IT で築く確かな学力の向上」に加え，この成果を将来的には高齢者や障害者のためのコンテンツ開発に役立てたいと考えている。また，教育の情報化推進のコーディネーターとして，校内だけでなく他校へのサポートを積極的に行い，教育の情報化，地域社会の情報化の推進への貢献が期待される。

(1) 国際交流・・・韓国・オーストラリアとの継続的交流学習を学校設定科目「国際文化」や選択科目「英会話」で実施，「情報」の授業で生徒がテーマごとに制作物の web 化を図る（教科横断型）。交流には掲示板・テレビ会議システムを利用し継続的学習を重視する。英語・国語の基礎語学力の向上もねらいとする。

(2) 国内交流（学校間交流・地域交流）・・・障害者へのアクセシビリティを配慮したコンテンツを制作し，地域へ役立つ情報発信を実践する。フィールドワークにより情報収集する中で，地域との連携を深め，掲示板を利用して養護学校や他校，地域の高齢者との意見交換をする中で，情報発信者としての責任感を体験する。また，制作物をテーマに養護学校や学校間の交流によって知識を深め充実させる（3 年選択科目で平成 13 年度・14 年度より車椅子トイレマップを実践）。

(3) 産学連携交流・・・専門家との TT により実社会との接点をもてる授業の実践，社会への興味関心を向上させ，産業社会の将来を担う人材の育成につながることを期待する。ワークショップなどを展開しプレゼンテーション能力向上させる。今年度は「企業の組織・経営を解剖しよう！～回転寿司業界における経営戦略～」というテーマで 3 年選択「政治経済」の授業の中で「米進出プロジェクト」に挑戦，掲示板などで企業の取締役会との意見交換を継続的にもち，制作物を web 化することで企業側からの意見を求め，プランの再考を繰り返し，社長に対する企画発表会を実施した。

(4) 高大連携交流・・・平成 15 年度から教科「情報」などで，テーマごとに大学の授業との連携を継続的に図る予定である。



図 2. 産学連携「商品開発部の様子」

3. シンモク高校(ソウル)との交流学习

(1) 学校設定科目「国際文化」の開講

本年度、兵庫県教育委員会から選択科目「国際文化」を学校設定科目として開設することが認可された。その当初計画の学習内容では、日本の国内に住む、外国人の歴史・状況・文化について学ぶ・東北アジアの文化と日本文化の交流史、日本文化の形成史について学ぶ・日本の民族差別と差別解消の歴史を学び、日本の国際化の方向性を探る、以上3項目がシンモク高校との交流学习に密接に関わっている。そして、学習活動の大きな柱として、本校が実施している「Global Communication Projects」の一環としてのコンピュータを使用した学習を位置づけた。交流の主体は、本校の日本人高校生、本校の在日コリアン高校生、そして韓国の高校生の三者交流ができれば理想的であるという思いが担当者にはあった。そこで、3年生から本名(民族名)で学校生活を始めた在日コリアン生徒が「国際文化」を選択するための働きかけと、韓国の交流相手校探しの作業がはじまった。



図3. 韓国との交流準備調べ学

(2) 高校生の三者交流をめざして

本校の在日コリアン高校生 KFJ は、この選択科目に当初から興味を持ち、本名で生きることを選んだ自分のアイデンティティを確立する場として積極的に関わっていききたいという希望を持っていることが判明して、第一のハードルはクリアできた。次に、韓国の交流校探しである。韓国総合教育院(韓国文部科学省の在外公民教育等を目的とした出先機関)にこの三者交流の目的を説明し、交流校探しの協力をしていただくことが出来た。そして、本校が提示した条件をすべて満たすシンモク高校(ソウル)を紹介していただいた。シンモク高校の担当教員との折衝は、英語や韓国語による電子メールでの打ち合わせ及び夏休みの訪問でほぼ完了した。問題は、それほど高い問題意識を持って選択した訳ではない日本人生徒に、事前学習によってどう学習活動への動機づけを行なうかであった。



図4. 交流用掲示板表紙

(3) 事前学習による興味づけ

歴史学習として、江華島事件から明成皇后殺害事件、韓国併合までの通史と「何故西宮に在日コリアンが在住するのか?」という郷土史の学習。ハングルや韓国語会話の学習。テレビドラマの鑑賞による韓国の文化の学習。在日コリアン当事者を講師として来て頂いての「在日」の歴史や文化の学習。そしてインターネットや書籍による調べ学習へと進んでいった。なによりも、生徒が興味を持ったのは、在日コリアン当事者の生々しい証言であった。さらにそのような歴史を経て、現在本校で日本人生徒と在日コリアン生徒がどのような思いで、どんな高校生活を送っているのかを韓国の高校生に伝える作業と、それへの韓国からの返信への期待が少しずつ高まっていった(図3)。

(4) コンピュータを使用した交流学习

情報担当教員の全面的な協力を得て作成していただいた、交流用掲示板(図4.)を使用しての、生徒の自己紹介の書き込みが始まると教室は、俄然、活気づいた。さらに、掲示板では表現が困難な画像や映像については、「国際文化」選択生徒が作成した原稿に従って、コンピュータの授業選択生徒がwebページを作成することによって、ビジュアルな日本の高校生活の紹介や自己紹介が可能になった。なお、掲示板やwebページは2~3人編成の班ごとに作成し、使用言語は英語を基本にし、KFJは韓国語を使用した。また、日本人の友人が見たときの理解しやすさを考慮して、韓国語・英語の後に日本語も付記した。

以上のような予備交流の後、シンモク高校とのテレビ会議が実現した(図5)。このシステムもまた、県教育委員会と本校情報担当教員の協力によって作られたものであり、ソフトやマニュアルも本校からシンモク高校へ送付したものを使用していただいた。テレビ会議での言語は、トライアル時は在日韓国人の本校職員とKFJの韓国語及び英語。12月20日の本番では、韓日及び日韓の二人の専門通訳をお願いした。

(5) 生徒の感想と担当教員の評価

このような授業を実施して、日本人生徒が「近くて遠い隣国」の高校生と親しく、素顔が見え、息づかいが聞こえる交流できたことの意味は大きい。また、自分の同級生に在日コリアンが存在することを実感し、在日韓国・朝鮮人問題を自分自身に関わる問題として捉えることも出来たことが生徒の感想文から覗える。KFJにとっては、日本の学校の中で、初めてありのままの自分を出して学習できる場であり、級友がそれを受け止めてくれる場でもあった。この経験は彼女の成長にとってはかけ替えのないものになるであろう。そして、このような授業を可能にしてくれたのは「Global Communication Projects」関係職員のTTである。



図5. 02.10.23 テレビ会議トライアル